私の見た昭和の思想と文学の五十年

下

小田切秀雄

集英社

私の見た昭和の思想と文学の五十年 下

一九八八年四月一〇日　第一刷発行

定価　三八〇〇円

著者　小田切秀雄
装丁者　田村義也
発行者　堀内末男
発行所　株式会社　集英社
〒101-50 東京都千代田区一ツ橋二の五の一〇
電話　出版部（〇三）三三〇-六一〇〇
販売部（〇三）三三〇-六一七一
製作課（〇三）三三〇-六〇八〇
印刷所　大日本印刷株式会社

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

© 1988 H.ODAGIRI Printed in Japan ISBN4-08-772637-1 C0095

目次（下巻）

第三部

30 理想主義的情熱と、さめた眼と——二つの『共産主義的人間』、ポポロ事件、等……11
31 健康な顔をした頽廃——マルクス主義者の場合……26
32 今ではまったく当り前のことが——思想のドラマ……40
33 対象からの促しと内発と——文学史や概論を書くさいの矛盾や願望や年齢のこと……55
34 風通しが、いいか、わるいか——個人意識と社会意識……69
35 自己の心内を問われる……83
36 見えざるベストセラー——現代文学の一角から……97
37 書斎派作家の気迫、批評論争……111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

38 大学政治と自我——組合の〝文学者委員長〟と大学理事……125
39 大学の総長代行とは。また、丁玲・胡風らのこと……139
40 文学と政治の関係の冷却——その破局に向って……152

第四部

41 安部公房、中野重治。留学、パリ到着……171
42 パリの二カ月間。森有正ら……189
43 西ヨーロッパ縦横自在に——文学的紀行……204

44 永遠の都ローマ、極貧の南イタリア。ベルリン大学で起ったこと……220
45 『驢馬』と『種蒔く人』を蘇らせる。イワノフ『装甲列車』……237
46 北村透谷と石川啄木。それにしてもわたしは――……252
47 〝喜劇は終った〟か？……266
48 小熊秀雄。金子光晴。〝人間の顔をした〟社会主義……281
49 ソ連とのみょうなこと。および川端康成、沖縄、黒島伝治……297
50 最高裁長官を訴追。一〇円ほどのヒューマニズム……314
51 志賀直哉の死、高井有一。学生反乱と文学……329
52 大資本のバラ色の夢、わたしの理想……347

つけたり。雑事若干……364

付　録

自筆年譜……368

索引……421

私の見た昭和の思想と文学の五十年 下

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第三部

30　理想主義的情熱と、さめた眼と

二つの『共産主義的人間』、ポポロ事件、等

二〇世紀政治のフォークロア

昭和六〇年代に入るとともに、新人の小説の手ごたえが、だんだん軽く、やわらかく、また明るくさわやかなものになってきて、かれらのニヒリズムさえが気がきいて見えるようになった。その意味でエンタテインメントに近づいているわけだが、エンタテインメントともちがうのはその一通り批評的な感覚と意識との活気で、いわばかろうじて純文学に属しているといっていいであろう。そういう作家の代表といっていい村上春樹・川西蘭・島田雅彦らのものを読んでいると、内向の世代・空虚凝視の世代どころか、いまでは〝ライト・タッチの世代〟というべき世代が成立してきているようにも思うが、他方に『パルチザン伝説』の桐山襲のような作家や青春文学のワクを出はじめた全共闘小説の作者たちもおり、一つのまとまった世代としてはとらえがたい。――もちろんこの軽いという面は、ごく新しい若い作家のことで、まさに時代の波頭がこうなってきているということにすぎず、年長の諸世代はそれなりに手ごたえのある作品を書いているのだが、それにしても新人のかなりの部分までの手ざわりがやや軽やかなものになってきているように見える。ところが、わたしのこの批評的回想はおよそそういうものとちがった重いところにきていて、それはタッチの仕方のちがいでもあるが、時代と人間との問題じたいが一時期をこえて続いている重いものをもっている、ということでもある。これらは軽いタッチで触れるだけですますというわけにゆかぬ性質をもっている。さしあたりはしばらく戦後にはじまる重い問題が続くことになる。

『林達夫著作集』（昭和四六―四七年、平凡社刊）の第五巻は、『政治のフォークロア』と題されているが、実際にその

巻には〝二十世紀政治のフォークロア〟というサブ・タイトルをもった二つの文章が収められている。一つは『無抵抗主義者』(昭和二五年一〇月号『新潮』)、もう一つは『共産主義的人間』(昭和二六年四月号『文芸春秋』)である。後者のはじめのほうに次のようなことばがある。

我々は今日の政治のこの宣伝逆宣伝の大洪水の中にあって、もしそのどれかに受動的に唯々として従うのでなければ、態度決定のため、いわば実情調査(ファクト・ファインディング)という難事業を自らやってのけなければならないのである。ところで、政治的スローガンや声明や公文書や宣伝の美辞麗句ないし悪口雑言にだまされて政治の実態を見謬ってはならぬということを最も口喧しく戒めているのは、外ならぬ共産主義者であるが、この教訓は翻って共産主義のスローガン、声明、公文書、宣伝についてもあてはまることは注意するまでもない。ブルジョア社会の観察や批判にかけては実に鋭利な切れ味を示す共産主義者にして、事、己れの陣営のことになると子供のような大甘な評価能力しか発揮できず、敵めあての見え透いた宣伝でさえそれを額面通りに受け取って少しも怪しまない人々を案外多く見かけるが、このメンタリティーは私に言わせると現代七不思議の一つなのである。この均衡を欠いた精神薄弱症の発作は私の経験では特にソヴェト・ロシアに関するクレムリンの自画自讃的宣伝への反応においていちばん多くあらわれるようである。

もちろん二つの世界の冷たい戦争が激化するにつれて、反対陣営からのいわゆる反共反ソ宣伝もまた熾烈を極めており、その中には全く笑止な眉唾ものと共にまたいかにもまことしやかなものの多いことも事実である。だから、いずれにせよ、我々のファクト・ファインディングは予想以上にまことに困難な仕事ではあるが、しかし共産主義的人間とは何であるか、彼は一体何をしているのか、また何をすることが出来るのかを知ることの、人々にとって今日ほど緊要になっているときはない以上、誰しもこの操作に怠慢であることは許されないであろう。これは始末におえぬ政治嫌いで世事に全く疎い一介の書斎派にすぎない私ごときものにもあてはまることだ。私はいま自分の最も不得手な、最も心に染まぬ仕事をしなければならぬ羽目になっているのである。

政治の宣伝逆宣伝のなかでのファクト・ファインディングの話のなかに、いきなり共産主義的人間の問題が出てくるのは、その問題をきわめて理想主義的に提出していたわたしたちおよびそれがあるていど受けいれられていた当時の気流にたいする、一種の平衡感覚による批判としてである。かれは、その〝ファクト・ファインディング〟の結果として、当時のスターリンおよびソ連がいかにバカげた、すじの通らぬ主張や政治をやっているかを、一つ一つの事実列挙によって明らかにし(たとえば、世界の科学技術史上の価値ある発見や発明は一四世紀以降すべてロシア人によって行なわれた、ラジ

オも、蒸気機関も、ペニシリンも、飛行機も！　というたぐいの、ほとんど正気の沙汰でない超ナショナリズムの論がひとときソ連でまかり通っていた。また、水爆準備が進められていたはずなのに、ハイゼンベルクやボーアやアインシュタインの原子物理学を〝西欧の神秘的物理学〟として〝批判〟した。ショスタコーヴィッチもプロコフィエフも〝批判〟された。チェコスロヴァキア等の〝衛星国〟にたいしては、それぞれの国の偉人や英雄をすべて抹殺し、スターリン崇拝を

2冊の『共産主義的人間』。左は林達夫著（昭和26年5月、月曜書房刊）、右は小田切秀雄著（同年12月、弘文堂刊）

おしつけた。等々、の無数の事実がこの林の文章の中にあげられている）、それは何びともうち消すことのできぬ事実、弁護の余地のない愚行であった。では、どうしてこういう事態が生じたのか、どこで狂ってきたのか、どうすればいいのかを、林は問おうとしていない。〝ファクト・ファインディング〟というのはその意味で、これらは〝二十世紀のフォークロア〟だ、として突き放しているだけだ。

いや、全く問おうとしていないわけではなく、〝人は権力と特権というものがからりと人を変えるものだという阿呆のような簡単な心理のメカニズムをあまりにも忘れているようだ（中略）。政権が共産主義的人間を「内から」危機におとしいれる懼れのあることは、ちょうど教権がキリスト者を「内から」危機におとしいれたと同様である。ソヴェト同盟において、他のどこの国の共産主義的体制よりもその権力機構の自動性（オートマティズム）そのものが共産主義的人間を歪曲と変質と腐敗とに導く危険があるということは、二十世紀の今後の半世紀においてますます明らかになってゆくと思われる、是非とも人々が記憶しておいてよい逆説の一つである〟、と書いているところがある。この指摘は正確であり、二〇世紀の後半はまさにかれのいう通りになっているのだが、共産主義権力のオートマティズムと、それに伴う歪曲と変質と腐敗とにたいして、どうしたらいいのか、何をすることができるのか、絶望しているほかはないのか、という問いには林はまったく関心を示していないのである。しかしかれは、ほんらいはそういう問いに関心をもっていいはずのひとだった。この文章の

なかでも、

私はかつてフランスのルイ・アラゴンの『共産主義的人間』という書物を感動と当惑との入り雑じった奇妙な気持を以て読んだことがある。それは現代の『黄金伝説』ともいうべき美しい本の一つで、フランス人民の自由と独立とのために率先してナチズムと闘ったヒューマニスト＝英雄の殉教者伝ともいえるものがその内容をなしている。アラゴンによれば――誰かの要約を借りていうと――共産主義的人間とは、その社会的出身の如何を問わず一度はっきりと世界を見てとってしまったがために、以後は何ものも――その一身の安泰も幸福も、この明識には及ばずと考えて、それに準じて行動する人間の謂である。いわば人間を自分自身以上に置き、自分のためには何も求めず、人間のためにはすべてを求める人であり、自分に関する一切を犠牲にして、万人のためにその幸福と安泰とを希求してやまぬ人である。――このような立派な性根と善意とをもった共産主義的人間が、単にフランスばかりでなく、地球のいたるところにかつて存在したこと、今も存在していること、また今後も存在するであろうことを私は少しも疑わない。私もかつて身辺に野呂栄太郎の如き共産主義的人間の典型を見ていたからである。しかしこのような英雄は、キリスト教世界でいえばむしろ聖者の系列に入るべき純粋型であって、世界とそして共産主義そのものの運命を左右する共産主義者のいわば政治ボス型とは、同じ共産主義者とはいっても実は雲泥の差があるのである。共産党の政治的指導者にしてそれを兼ね備えるということは、ローマ教皇や枢機卿、大司教にして聖者になったものがまことに少なかったと同じに稀有な例外ではなかろうか。……

と書いていて、林が、共産主義的人間の理想的なタイプについては、その実在を将来にまでわたって信じ、深い敬意を抱いていることが知られる。この文章を書いた段階では、少くともそういうふうに見える。もともと林は日本では珍しかったデモクラートのしかも左翼で、歴史および文化については戦前に一時、そのころの自称マルクス主義者よりもはるかにマルクス主義的にすぐれていたことがあり（いまかれの『著作集』第三巻に入っている昭和九年の『文芸の社会的基礎』その他。林については第九章でもべつの角度から触れた）、かれの晩年の『思想のドラマトゥルギー』（昭和四九年、平凡社刊）で回想されていることからしても、共産主義的人間の理想的タイプについての右のような敬意じたいは本心からのものであった。

しかし、この林の文章の書かれる少し前から、林ももち出しているアラゴンの『共産主義的人間』という本などを中心に共産主義的人間の理想型がさかんに論じられ、折から熱い注目が寄せられるようになっていたフランスの〝レジスタンス〟文学のことともに、朝鮮戦争下の権力への抗争の一翼としてはげしく理想主義的にそれは論じられたのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com